

〔小林秀雄氏への公開状〕

牧野信一

青空文庫

この手紙を書くべく考へはぢめて、もう十日あまりも経つのであるが、手紙といふても稍かたちの違ふものであるから、起きあがつてからと思つてゐるうちに、中々風邪が治らず、もう間に合ひさうもなくなつたから、寝たまゝ弁解風のことを書く。

この間、風邪をひいて寝たはぢめに、いつかの君の小篇小説「からくり」を読み直して、仲々面白かつた。これに就いての、愉快的読後感を書きおくらうと思つた。

いつぞや、レインボーのサロンで、君の眼前でこれを読み、君に読後感を叩かれた時は、内心今度と同じ面白さを感じてゐたにも関はず、つい、それをそのまゝ云ひ損つてしまつた。一言か二言何か云つただけに終つてしまつたのだつた。

「この次には、こんなのではない、もつと別なのを書く、書いたら見せるぞ。」
と君は、あの時云つた。

「見せて呉れ。」

僕は即坐に答へた。

その時、それに就いての話は、それだけで終つてしまつた。

あれは、たしか夏のはぢめの頃ではなかつたか。――そして、あれきり、別の作を君は

未だに示さない。僕は待つてゐる。先月だつたか、さいそくの手紙を出したと思ふが。

「別なの——」は、未だ知らぬが、僕は、あの短篇のやうなものでも、面白い——僕は、未知の作者のものとして、不意にあれを発見したならば、その時直ちに、その作家に手紙を書いたに違ひない。

斯う書いて来ると、次第に亢奮を覺へて来て、今日の風邪状態では、書つゞけるのが困難になるから——次の機にゆづる。

次の機会といふのは、君に依つて第二作を示された時と、約しておく。手紙を出すであらう。

とう／＼僕も此方の定つた住人となつた。下宿生活の疲労が兎し加けに風引きでもう半月になるが、一度そつちに出かけたきり、毎日寝続けた。——僕は、この間田舎から携へて来た一枚の石版画——ピエル・フォンの古城の図を額ぶちに入れて、壁に掛け、城内に残存してゐるといはるる、円卓子の騎士達やシャルル・マーニユの兵士等のアパートや食堂を忍びながら、余もこの病ひの恢復を待つて、この新居で、最も盛大なる Round table の夜会を催さう——と計画してゐる。

青空文庫情報

底本：「牧野信一全集第四卷」筑摩書房

2002（平成14）年6月20日初版第1刷発行

底本の親本：「作品 第一巻第六号（十月号）」作品社

1930（昭和5）年10月1日発行

初出：「作品 第一巻第六号（十月号）」作品社

1930（昭和5）年10月1日発行

※題名の「」は、底本編集時に与えられたものです。

※「小林秀雄氏への公開状」と題した企画への、回答です。

入力：宮元淳一

校正：門田裕志

2011年8月1日作成

2016年5月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

〔小林秀雄氏への公開状〕

牧野信一

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>